### **アミア・ブレトネメル ― スラム時代設定案（0～8歳）**

**1. 生まれながらの地獄**

* 生まれたその時から、アミアの人生は「社会の下層」だった。
* スラムの湿った石畳の上、鉄屑と腐肉と静電ノイズが交錯するような空間で、彼女は息をしていた。

**2. 両親の喪失と孤独**

* 両親はアミアが5歳のときに疫病と暴力で死去。
* その後、彼女は一人きり。言葉をかけてくれる人もいなければ、名前を呼んでくれる声もない。
* 「人間」は、彼女にとって加害者であり、傍観者でしかなかった。

**3. 障害と“生き方”の再定義**

* 生まれつきの神経疾患による下半身不随。立ち上がることも、普通に歩くこともできない。
* 地面を這い、配線ケーブルを掴み、捨てられた車椅子に乗る。すべては「生きる」ための手段。
* ただ生きるだけで、常に全身が“戦い”だった。

**4. 初期能力覚醒と犯罪的サバイバル**

* 6歳頃から、「電子機器と神経リンク」する力が自然に発現。自販機のハッキング、カード端末の誤作動誘発などを駆使。
* 飲料、食糧、廃棄処理データなどを“盗む”ことで、生命を繋ぎとめる。
* だがその力すらも、「正義」には認められず、ただの“犯罪”とされた。

**5. 無学と無記名**

* 読み書きも計算もできない。自分の名前は「音」としてしか知らない。
* 誕生日はおろか、自分の年齢すら正確には分からず、「冬を何回超えたか」で数えていた。
* 世界は、「数字」と「言葉」が支配する場所だった。だから、彼女は「世界からはじき出された存在」だった。

**6. 暴力と性の脅威**

* 幼さを持たぬ身体に、暴力と搾取が降り注いだ。
* 一部の“取引”では、身体を代価に食糧を得ることもあった。「売った」のではない。「奪われた」のでもない。ただ、「そうしないと死んでいた」。
* その記憶は、彼女の根幹に鋭利な「人間嫌悪」と「信頼不能」を刻み込む。

**7. 正義の不在と、信仰の破壊**

* 助けを求めても誰も来ない。彼女にとって「正義」とは、立って歩ける者だけが享受するご都合の神話だった。
* 「ヒーロー」という概念そのものが、彼女にとっては嘲笑でしかなかった。
* 「正義に救われなかった者」が、後に“正義に牙を剥く存在”になる。その理由が、ここにある。

**8. クリオス支社との邂逅（8歳）**

* ある日、機械偵察ドローンがスラム地帯を通過。偶然にもアミアの能力がそれをハッキングし、暴走を起こす。
* それを「異常反応」として察知した支社研究班がアミアを“発見”。
* 連れて行かれたのは救いではなく、“観測と収容”だった──だがそれすらも、彼女にとっては“地獄から一歩出る”ことだった。

## **◆ アミア・ブレトネメル：クリオス支社期 設定案（8歳〜敗北時まで）**

### **■【導入】地獄の次に来たのは、ラボだった**

* 8歳のとき、偶然自販機の通信ユニットをハックしていたところを、ヤファル・インダストリー クリオス支社の観測AIに捕捉される。
* 「異常神経反応を示すスラム少女」として回収され、そのまま支社内の“予備群棟”に収容。
* 同時期、**ファウスト計画**の基礎設計が動いており、「神経適合率が異様に高い子供」として目をつけられる。

### **■【9歳】ファウスト被検体へ**

* 神経インタフェース実験で他の被検体を圧倒する反応を示し、**正式にファウスト計画の第1被検体に登録**される。
* 名前は使われず、\*\*「FA-01」「機体（Unit-01）」\*\*などの番号・分類名で扱われるが、彼女は表面上それに抵抗しない。
* ただし心中では──「せめて名前くらい、呼べないの？」と、どこか苛立ちを感じていた。  
  + 「名前なんて音だ」──そう自分に言い聞かせつつも、\*\*"呼ばれることのなさ"\*\*は、どこか彼女を空っぽにする。

### **■【環境】“快適すぎる牢獄”**

* 医療処置によって、彼女の身体は**劇的に改善される**。感染症、寄生虫、栄養失調、皮膚病──すべてが治療対象になった。
* 電動車いすも支給され、ようやく「地面を這わずに移動できる」ようになる。これには素直に感動すら覚えた。
* 空調の効いた居住棟、定時の食事、十分な衣類と入浴設備。  
   → 彼女にとっては\*\*「天国ごっこのような地獄」\*\*だった。

「ああ、私は生きてる。しかも、穏やかに。でも──これは“私のため”じゃなく、“データのため”なんだよね。」

### **■【人間関係】同情よりも、無関心でいい**

* 研究者たちは冷淡で、彼女を「被検体」としてしか見ていない。それは彼女にとって、**むしろ好都合**だった。
* 憐憫も、哀れみも、優しさのフリをした手つきも──スラムで死ぬほど見てきた。
* だからこそ、\*\*「無関心な目」\*\*の方がずっと楽だった。

「この人たちは“人として私を見ることができない”んだろう。……それでいい。  
 私は、“人間”をやめてまで這い上がったんだから。」

### **■【精神性】「自分は、私である」という誇り**

* 番号で呼ばれようが、義務的に食事を与えられようが、被検体として日々データを取られようが──  
   → 彼女の中には、\*\*「私だけは、私を捨てていない」\*\*という強い意識があった。
* 人間として扱われない環境にあっても、彼女は\*\*「自分が何者であるかを、他人に決めさせない」\*\*。
* むしろ、“人間扱いされない環境だからこそ”、彼女は逆に「自分であること」を研ぎ澄まそうとした。

### **■【成長と深化】実験と能力の変質**

* 年齢と共に、神経接続能力は飛躍的に向上。AIコアとの交信すら可能に。
* ファウストと彼女の間に、**「人機融合的な同期」が発生**し、制御を外れかけたこともあった。
* その過程で、彼女の価値は「危険なほど高く」、支社内でも“特別”として扱われていく。  
  + だが、彼女はそれを“誇り”ではなく、“鎖の厚さ”としか見ていなかった。

### **■【グリデーオスとの邂逅】**

* とある極秘実地テスト中にグリデーオス部隊と交戦。  
   → ファウストの暴走を引き起こし、アミアは意識を失う。
* 敵側であるはずのグリデーオスは、彼女を破壊せず、保護という形で回収。
* 「どうして私を“殺さなかった”の？」──その問いは、彼女の中でずっと答えを探し続けている。